

各支店長・営農指導員殿

5 月の中旬も低温・寡日照の天候で推移し、下旬の週間予報も曇天が続く見込みとなっています。こうした気象のもと、ジャガイモの生育遅れ、里芋はなかなか芽が上って来ず、ナスやピーマンは殆ど生育していないなど大きな影響が出ています。16 日からはやや気温も持ち直し、平年を上回る日も出現し、アブラムシやアオムシなどの害虫やナメクジの発生が見られてきております。5 月 23 日には雨とともに突風を伴う強風が吹き荒れ、一部でハウスに被害が出るなど、依然として不順な気象となっています。

野菜ではウリ類のべと病、トマトなどの灰色カビ病、葉カビ病、ジャガイモやカボチャの疫病など糸状菌（カビ）などを主体とする病害の発生が懸念されます。圃場の排水促進と、作物の観察を怠らないようにしてください。

先週発生している障害事例

早期出蕾（ボトニング）

春ブロッコリーが育苗期から定植直後の低温により、花芽が早期に形成されてしまったため、葉数が不足している中で花蕾が上がってきてしまいました。これにより、出荷規格の花蕾径 12 cm に達するものが極めて少ない状況にあります。このため、出荷先と調整の上、規格外の荷受と販売対策をとっています。



野菜に対する薬害（除草剤？）

トマト苗の先端がいじけているという相談がありました。現場に行ってみますと、ハウスの中にあるトマトは勿論、つる有インゲン、ピーマンすべての先端部に萎縮の異常が見られていました。疑われることは、灌水に使った水に何らかの除草剤成分が混入したのではないかと言うことです。除草剤はホルモン剤的な作用をするものが多く、微量の混入で白化、黄化、縮れなどの障害を引き起こします。ただ微量のため、作物が枯死することはありません。時間が経過すれば、新たに展開してくる葉は正常に戻ることがほとんどですが、生育の遅れは避けられません。



天候不順の中で今後注意すべき事項

5 月下旬は通常は最も気候が安定する時期ですが、本年は不順な天候が続いています。しかし気温の方は 5 月 16 日から平年を上回るようになってきております。こうした状況の元では、稲のイモチ病や麦の赤カビ病菌などの糸状菌による病害の多発生が心配されます。野菜においても、疫病、べと病、つる枯れ病、葉カビ病など主要病害が糸状菌によるものです。露地、ハウスとも以下の点に留意して作物管理に当たって下さい。

○圃場周りの排水の徹底。

特に転換畑は排水溝をしっかりと掘らないと水が停滞します。ハウスにおいては、折角はった根が侵入水により傷みます。現在ハウス物は着果負担が急激に増しているところなので、根の痛みは品質・収量に大きく影響してきます。ハウス内への雨水の滴り落ちもできるだけ排除してください。また、露地のスイカ、マクワウリ、カボチャなどはつる先が溝に垂れ下がると、必ず病気の元となるので、畝上にかきあげておく。

○泥の跳ね上がりを防止してください。

雨による跳ね上がりを防止するため、敷き藁は有効な手段ですが、強風によって飛ばされないようにすると共に、ナメクジの隠れ家となりやすいので注意しましょう。

○作物は濡れている状態や雨気の際は触らないこと。

植物体に傷をつけることが病気の原因となる。また、圃場、特に畝の中には脚を踏み入れないことです。

○マルチの上の水溜り排除。

マルチの上に水溜りができると、特につる物は病気にかかりやすくなるので見回り、水溜りがある場合は穴を開けて排出する。また、ウリ類、特にスイカ、メロン、カボチャの実が着いて1週間から10日ほどしたら、パットなどを敷き、花落ち部分がマルチなどに密着して常に濡れた状態にならないようにしてください。

○野菜の誘引をしっかりし、風による障害を受けないようにして下さい。

今年は強風が度々吹きます。野菜の中でもキュウリとナスは風に弱い作物です。雨よけや棚などは支柱をしっかり立てると共に、風で作物が揺すられないようにしっかり誘引して下さい。また、マルチも風によるめくれが見られ、植えられた苗が抜けたり、折れたりして傷んでいます。マルチの裾をしっかりと押さえるとともに、土などを乗せておいてください。



○通風採光を図り、予防散布に努めて下さい。

病害は暗くて湿り気が多い環境で発生しやすくなります。また素肥料の多用も病害の原因になりますので気をつけましょう。大雨や強風の後はジマンダイセンやボルドー剤などを散布し予防に努める。また、雨が多いのと、気温が上がってきたため、今後ナメクジ被害が多くなってきます。早めに対処してください。

ジャガイモの疫病予防

本病はジャガイモ病害の中で最も重要なものです。ジャガイモの開花期の5月下旬～6月中旬に2～3日間雨が降り続くと発生しやすい。発病の激しい時には数日でほ場全面に広がる。また、窒素質肥料の過用から茎葉が過繁茂となったところや、風通しの悪いところで発病が激しくなる。

○防除薬剤

予防散布・・・ダコニール 1000 (7日前まで、1000倍)
発生初期・・・フロンサイド水和剤 (14日前まで、2000倍)
いずれも疫病菌は植物体内に入り込んでしまいますので、発生が広がってからでは農薬で抑えることはできません。予防散布に努めてください。

